 doi.org/10.34360/00011437

# 胡傑監督『星火』の構成と意義

土屋　昌明

## はじめに

『星火』（制作＝江芬芬、監督・撮影・編集＝胡傑　2013 年制作）は、1960 年に中国甘粛省で発生した、知識人による反体制地下活動に対する政権の弾圧事件を扱ったインディペンデントドキュメンタリーである。

本作で描かれたこの事件（以下、星火事件）の要点は次のようである[1]。1957 年に反右派闘争で右派にされた蘭州大学の学生たちが、労働改造で赴いた農村で地下グループを作り、ガリ版で『星火』と題した印刷物を発刊した。彼らは、大飢饉がおこり農村で餓死者が大量発生した原因は人民公社と大躍進という政策にあった、とする分析をそこに書いた。第 1 号を印刷したあと警察から摘発され、本作で判明した者だけでも 25 名が懲役となり、うち 2 名が懲役後に死刑となった。

本作の状況を簡単に紹介しておきたい。本作は胡傑と江芬芬夫人の発意と資金で制作されたインディペンデント映画である[2]。中国国内で劇場公開されたことはなく、DVD の販売と流通もない（香港を除く）。日本国内の上映は、本研究所特別研究助成土屋グループが、2015 年 3 月 12 日と 13 日に日本語版（拙訳）を上映し、13 日に討論会をおこなった[3]。DVD の販売と流通はない。2020 年現在、アジアンドキュメンタリーズのネット配信で日本語字幕版を見ることができる（このネット配信は中国国内ではアクセスできない）。海外では、管見によると、香港、台湾、アメリカ、フランス、ドイツの映画祭や上映会で上映されたようである。インターネットでは、YouTube に中国語字幕版がアップされている（監督がアップしたものではない）。

本作に関する研究は、映画批評と現代史の両側面があり得るが、本格的なものはまだ少ない。その基本的な重要性は、前稿で述べたように[4]、第一に、インタビューに答える登場人物の多くがこの事件の当事者であり、貴重な歴史証言となっていること。第二に、事件のおこった現地を直接撮影しており、この事件の現場環境を理解させる映像ともなっていること。第三に、画

---

[1] 詳しくは、拙稿「胡傑監督『星火』初探」『専修大学社会科学研究所月報』623 号（2015 年 5 月 20 日）を参照。
[2] インディペンデントドキュメンタリーと胡傑監督については、拙稿「中国の「民間ドキュメンタリー」とは何か―胡傑監督へのインタビュー」『専修大学社会科学研究所月報』598 号（2013 年 4 月 20 日）を参照。
[3] 詳しくは拙稿「封印された中国現代史に向かい合う：胡傑監督作品の上映会」東方書店『東方』428 号（2016 年 10 月）2-8 頁。
[4] 注 1 を参照。

面に映し出される地下刊行物『星火』の映像およびその文章は、従来、存在すら知られていなかったもので、非常に貴重であること。要するに、中国現代史においてこの事件がまったく消されていることに起因している。星火事件は、本作で初めて認識が広まったもので、それまではほとんど知られていなかった。試みに『岩波現代中国事典』(1999 年) を見ると、項目にも索引にも星火事件とその関係者は取り上げられていない。

本稿では、本作のドキュメンタリーとしての構成としくみを検討し、それを通して如上の第一の特長を吟味しながら、星火事件に対して本作がどのような解釈をしているのか分析したい。部分的に画面の説明と字幕の翻訳を提示するが、せりふの 1 カットを 1 シーンとし（1 シーンに別の素材の挿入がありうる)、それによって冒頭から番号をふったせりふを提示する。このせりふは、中国語字幕を私が校正した上で日本語に翻訳したものである。中国語字幕とその日本語訳は『中国 60 年代と世界』第 1 期第 5 号（2015 年 11 月）～第 2 期第 2 号（2017 年 6 月）で発表したことがあるが、この翻訳は映画字幕の字数制限を考慮していて正確さが不充分であるから、本稿では翻訳しなおしてある。

## 本作の構成の特長

本作は、まずドキュメンタリー映画としてすぐれた構成を備えている。単に星火事件のプロセスを叙述するだけでなく、そこにうかがえる人間性の尊さを示すとともに、当時の農村の悲惨な状況、権力の横暴さと個人の尊厳を一顧だにしない人権蹂躙についても提示している。本稿では、そのような構成の特長を、シーンとシーンのつなぎかたの分析を通して検討する。

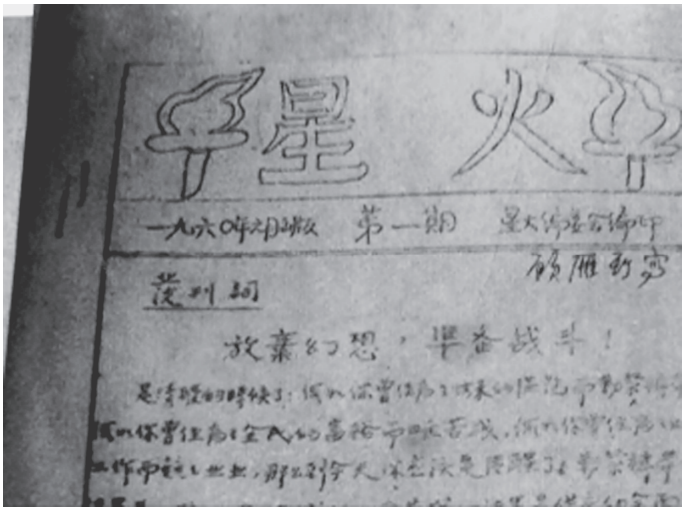
ドキュメンタリーは基本的に、シーンとシーンが内的な動因にもとづいて連続して 1 シークエンスを構成し、それが展開していくことで、視聴者をストーリー進行に引き付ける。したがって、構成する際にシーンとシーンに内的な動因を持たせて連続させることは、ドキュメンタリー創作の重要な手法である（本稿では「つなげる」「つなぎかた」などと称する)。本稿では、冒頭のいくつかのシーンのつなぎかた、本筋のストーリー進行の内的な動因、ラストシーンのフィードバックについて、具体的なせりふを取り上げながら分析する。

### 冒頭のシーンのつなぎかた

冒頭のシーン 00～04 は、本作の問題意識を提示する重要なシークエンスである。

00　（字幕）1959 年末、大躍進による全国的飢饉がおこった。1960 年 1 月、甘粛省天水の農村に、大躍進と人民公社が招いた徹底的な災難を分析・批判・記録した地下刊行物が現

われた。それは『星火』という。(『星火』の実物の複写が映る)　（タイトル）星火




画面に映し出されたこの資料は、本作で初めて実物（の複写）が視覚材料として提示されたもので、現代史の資料として驚くべき証拠写真である。なぜなら、星火事件が検挙されたあと、この資料は証拠物品として公安当局に没収され非公開だったはずだからである。没収されなかった残部がいずこかにあるのだろうか。いずれにせよ、監督はその複写を入手したのである。どのようにして入手したのかは知られていない。

01　甘粛省蘭州の「古城坪」という村の道路標識が映る。大型ダンプが土を満載して、坂道を苦しそうに登っている。監督は、坂の下から歩いてきた老人に質問する。

監督：文革の時、ここは刑場だったんですって？

老人：そう、刑場だったよ。

監督：銃殺するところを見たことありますか？

老人：あるよ、いつも見ていた。

監督：いつも……

老人：当初は銃殺が多かった。徐々に減ったがね。

画面に映る開発工事の大型ダンプは、経済発展に邁進する中国を象徴している。そんな中国では、刑場があった場所の景観など保存されない。ましてや歴史の真実などは雲散霧消してしまう。監督は文化大革命当時の刑場を探しており、それがなかなか見つからない。当時の中国

では、反革命犯を車上に乗せて引き回し、そのうえで公開処刑する風習があった。子どもの時に公開処刑を「いつも見ていた」老人が、刑場の場所を知っていた。このシーンが冒頭に置かれることで、雲散霧消する歴史をつきとめるには、老人の口述や証言に頼るしかない状況が示唆されている。当時の反革命事件の資料を調査する道は閉ざされているからである。

02　土甸子村という甘粛・隴西の小さな村、黄土台地に囲まれた畑、作物が風になびいて美しい。その丘の上の石碑の前で、チャルメラなどの伝統楽器で音楽を奏でる楽隊。石碑は杜映華のもの。杜映華の肖像写真が浮き上がる。
字幕：杜映華　武山県委の書記（星火事件逮捕者）

風になびく作物の美しい景色は、後述される大飢饉との対比を準備する。画面の石碑は、その景色を望む場所にあり、杜映華の墓を示している。中国の農村では土葬だから、ここに杜映華という人物の遺体が眠っているはずである。彼は武山県の共産党委員会書記であったことが字幕で示される。村を愛する指導者だったからこそ、作物のなびく村の景色を一望できる場所に墓があるのだとわかる。墓碑は真新しく立派で、「2004 年」という字が見える。楽隊は杜映華の墓参りに来た人に雇われて死者を弔う曲を弾いているのだろうが、参拝者は誰も映らないから、監督が雇い、みずから墓参りしたのだろう。つまり、この人物が本作の中心的人物であることが示されている。

03　今も村の診療施設で病人を診ている医者が、死刑直後のことを話す。
医者：杜映華が銃殺されたあと、地下活動をともにした仲間 3 人が、棺桶を買って、乞食を 4 人雇い、遺体に埋葬番号を打った。夜に遺体を納めようとすると、遺体がなくなっていた。話によると、蘭州医学院が実験に持ち去ったらしい。死亡通知書が出て、それを医学院の教師に通知した。医学院に郵送されたのをその教師が押さえたんだ。私が診察している時に見せてくれたよ。どうせ焼いてしまうからかまわないと。杜映華の息子たちには言うなよ、おまえがわかっていればいい、と言っていた。

処刑のあとでは医師が検死する、という連想で前のシーンとつなげている。杜映華は、銃殺されたあと、医科大学で解剖の実験に使われたことが示されている。本人はもちろん、遺族の許可もなく、遺体は持ち去られた。土葬を尊ぶ農村の伝統的風習では、死者は肉体を持ってあの世に行くという道教ないし民間信仰が信じられている。解剖では遺体は損壊されてしまうから、その信仰からすれば、遺族にとって非常な苦痛である。「杜映華の息子たちには言うな」と

は、そのような意味である。「どうせ焼いてしまう」ということは、遺体を解剖したあと火葬に伏して、骨だけを遺族に返すつもりらしいことが察せられる。灰となった骨だけなら解剖したとわからないからである。つまり、シーン 02 で見た墓碑の下には、実は杜映華の遺体はないのである。政治的原因で処刑されたうえに、墓所に遺体を埋葬することすらできなかったことが強調されている。

銃殺され、解剖に使われた杜映華は、寒村とはいえ、れっきとした共産党委員会書記であった。それが地下活動に関わったことで死刑になった。この地下活動、そして地下刊行物の事件とは、いったい何だったのか、という疑問が喚起され、それによって以下のシーンへとつなげていく。以上は、冒頭において視聴者に問題意識を持たせる仕組みである。

**ストーリー進行の内的な動因**

次に、本作の構成がこの事件の悲劇性をみごとに描き出している点を指摘したい。その悲劇性とは、『星火』に参加した彼らにとって、現実の変革は我が身の犠牲の上にしかおこり得ない、という状況にあった。目の前に繰り広げられる大飢饉の悲惨、権力の横暴、この現実に懊悩し、見て見ぬふりをするのではなく、これを変革すべきだと考える彼らは、具体的な変革方法をどのように考えたのか。本作は、この方法をめぐって彼らが「あがく」展開をストーリーの軸にして構成されている。以下にその展開を分析してみよう。

当初、大飢饉による餓死者の続出という現場を目睹した彼らは、個人的に共産党中央に投書するという方法を考えた。しかし、そのような方法は暴力的に抑圧された。そのことは冒頭の問題意識の提示後すぐのシーン 04 以下のシークエンスで示される。

> 04　画面は武山駅と鉄道に移り、続いて向承鑑（星火のメンバー）という老人が自室で、甘粛省の農村である武山に下放させられた 1959 年の状況を語る。
>
> 向：武山駅から村まで 5 キロを、この鉄道沿いに歩いたんだ。行く先行く先で土手に死人がころがっていた。私は驚いて、党中央に上書しようとした。現場のこうした状況を伝えようと思ったんだ。しかし、新聞では大躍進が好調だと言っている。私は右派だった。私の言うことを誰が信じる？　政策への中傷だと思われるさ。だから書いては捨て、死人を見ては、また書いた。上書しようという気持ちは、毛沢東に伝えようという気持ちは、変わらなかったんだ。ところが、1959 年の 6 月か 7 月ころ、大事件が起こった。それで私は考えを変えたんだ。

向承鑑は、この事件で懲役 17 年になった。彼が蘭州大学の学生だったころ、反右派運動で右

派とされ、甘粛省の農村である武山に下放させられたことは後述される。農村で労働しているうちに、大飢饉に突入した。それは彼が下放してから 2 年後、1959 年のことであった。ここでいう「大事件」という言葉が次のシーンにつなげる。

05　四川、内江、内江師範学院の校門。向承鑑の友人である孫自筠にインタビューする。
監督：仲間に隠れて手紙を書いたのですね？
孫：仲間には全く内緒だった。これは危険だとわかっていたからな。誰かに話すと、危険を分担させることになる。誰に話したか詰問されるからだ……

06　向承鑑のインタビューに戻る。
向：彼は現場の状況を中央に書いた、匿名で。誰に出したと思う？『紅旗』雑誌社だ。

ここで向承鑑のインタビューのシーンが挿入されることで、孫自筠の行為は仲間に内緒だったが、孫自筠が逮捕されたあと、彼の行為は仲間から共有されたことが示されている。

07　孫自筠へのインタビューが続く。
孫：私はずっと毛沢東を崇拝していた。子供のころから革命に参加していたんだ。だから、毛沢東は現場を知らないんだ、ごまかされているんだと思った。それでこの目で見た甘粛のことを『紅旗』に投稿した。『紅旗』は党中央の雑誌だ。党中央で餓死者を調査すべきだと書いた。至るところ餓死者だった。何の誇張もない。

このような中央機関への投書という方法は、当時よくあったもので、北京には投書や直訴を受け入れる専門の機関もあった[5]。ここには彼ら知識青年の思考の二つの限界が示されている。一つは、大飢饉の原因は地方政府の怠慢にあり、毛沢東および中共中央は、現場の悲惨な状況を知らない、と考えていること。もう一つは、現場から真摯な投書を中央に出せば、上から政策がおこなわれる、と考えたことである。1930 年代半ばに生まれた彼らは、高校生の時に共産党の革命成就を経験し、共産党とともに新中国を建設する志に燃えた世代である[6]。彼らが共産党への反抗に至るためには、この限界を超えなければならない。シーン 08、09 を経てシーン 10

[5] 当時の直訴の受け入れ機関の様子が、山崎豊子原作『大地の子』の NHK テレビ版（1995 年）に復元されており、日中共同製作なので信頼性が高いと思われる。インディペンデントドキュメンタリーでは、直訴する人々を撮った趙亮監督『上訪』（1996-2009 年）が重要である。
[6] 王兵監督『鳳鳴』（2007 年）の語り手である和鳳鳴が、新中国の建設のために自分の進路を変えた当時の感懐を述べている。

で、孫自筠の行動がこの限界を彼らに悟らせたことを示す。

10　孫自筠へのインタビューが続く。

監督：手紙は『紅旗』に届いたのですか？

孫：絶対に届いたはずだ。そして編集部は公安に持って行った。公安は反革命事件とみなした。

監督：捕まった時はどんな感じでした？

孫:天水の甘泉という所で捕まった。(甘泉の現地が映る)生産隊で用事があるというので、行ったら縄で巻かれた。そのまま蘭州へ連行だ。その時こう思った。連れて行くなら直接話してやろう、私が見た農村の状況を話してやろう。行ってみたら話ができる場面などない。殴られて気絶するだけだ。釈明など無理。生きたければ罪を認めるしかない。罪がなくても認めるしかないんだ。ひどくぶん殴られる。命がけだ。縄に巻かれたまま糞まみれになり、手紙一通で懲役 10 年になった。

『紅旗』という雑誌に投稿するのは、今なら読者の投稿にすぎないが、当時、この種の投稿は危険な行為であることを孫自筠は自覚していたことがわかる。彼は自分の行動のリスクを自覚しておりながら、自己犠牲的な行動が何らかの効果を発揮すると信じている。孫自筠の事件は、餓死者のことを関係部門に上訴しても、解決どころか、みずから禍に陥るだけであることを向承鑑たちに示した。しかもこの事件は、地方政府が現場からの上訴を抑圧するだけでなく、中央の関係部門も、地方政府に命じて地方からの上訴を取り締まらせたことを示している。個人で上訴してもだめだとすると、どうしたらよいのか。これにより、彼らがグループを作った契機が示されている。

このあと本作は、当時の大飢饉と抑圧的な政治体制を詳細に説明する。ここでは、『星火』関係者を含む、当時を目撃した民間人の証言と同時代の資料としての『星火』の論文が使われている。民間人の証言と『星火』の論文は相互に裏打ちされ、『星火』のメンバーが、大飢饉の原因は天災ではなく政治にある、と認識していたことを示していく。

そしてシーン 37 から、『星火』が作られた要因について、おもに譚蝉雪の証言に『星火』の資料をつなげるかたちで展開されていく。

37　星火のメンバー譚蝉雪が語る。

問：林昭が張春元と知り合ったのは？

譚:孫和の妹は林昭と同級だった。孫和は妹名義で林昭に手紙を書いた。すぐ返信が来て、

林昭の『海鴎』も同封されていた。孫和は当然ながら張春元に話した。張春元はこの情報を知って、林昭と連絡を取る必要があると痛感した。林昭の背後には「広場」がいたからだ。張春元は「広場」と連絡を取りたがっていた。ただツテがなくて困っていた。

38　資料映像と胡傑監督によるナレーション。

監督：ここで言う「広場」とは、1957 年に北京大学学生が 5.19 民主運動において自費出版した雑誌の名前である。そこには社会問題への彼らの深い考えが窺える。1961 年 10 月に林昭はこう書いている。「北京大学と『広場』の影響を受けて、私は学外との連繋を重視した。顧雁らは私を蘭州によんだ。主観的には、私は『広場』を代表して考えようとした」。

シーン 38 は、シーン 37 の証言を説明している。これにより、星火事件の中心人物と思しき張春元は、反右派運動直前におこなわれた、党への批判の呼びかけに呼応した北京大学の学生運動の思索と経験を参考にするとともに、甘粛省でおこっているローカルな事件を、中央の足元である北京大学に伝え、ローカルなレベルで留めまいとしたことが示されている。つまり、個人の「投書」からグループの「運動」へと足を踏み出したのである。

39　譚蝉雪の話に戻る。

譚：そうと知って、張春元は林昭に会いに上海へ行った。手紙に書く問題じゃない。林昭に会って話し合ったあと、林昭は互いに共通の言葉を持っている、共通の思想・共通の感情があると感じた。だからこそ林昭は、自作の詩「プロメテウス」をその場で張春元に渡した。

40　イメージ映像とともに、林昭の詩『プロメテウス受難の日』全 368 行の一節を監督が朗読。

アポロンの金車が次第に近づき
天に赤い黎明がのぼった
カフカスの峰々は朝焼を迎え
崖の上でプロメテウスは眠りから覚める……
……
麗しき朝の光よ　お前はいつ―
私にとって自由の輝きの象徴たりうるか
……

鎖は冷たい蛇のごとくまとわり
彼の全身はしびれ痛む
鎖は皮を破って肉に食い込み
岩のような凹凸は骨まですりつぶす
大地に転々と続くドス黒い血痕は
受難者の姿を聳え立てる……

41　譚蝉雪が林昭について語る。

譚：林昭は初めこの印刷物の刊行に賛成ではなかった。それには 2 つの理由があった。まず、秘密でこれを印刷すると、執筆者と印刷者に危険なだけでなく、読者にも同じく危険だ。それにもう 1 つ、これを印刷したあと、人に何を与えられるのか？ リスクを払う価値があるのか？ 誰でもわかっている話なら、わざわざ書くまでもない。しかし林昭はこうも言った。考えを交換して、影響を拡げて団結しあうために、特に分散して自由に行動できない状況では、『星火』は啓蒙に欠くべからざるものだ。

42　胡傑監督によるナレーション。

監督：林昭は「個人の思想的立場の反省」という文で、蘭州大の友人への評価を、こう書いている。「たぶん黄土高原の方が、きらびやかな北京より広くてたくましい。蘭州大の友人は明るくて外向的で行動的だが、じっと考えることを好まない。これはやはり客観的環境と関係している。こうした行動力によって造反すると、先取的なのは長所だが、待てないのが短所だ」。

43　譚蝉雪が林昭について語る。

譚:林昭は何を言おうとしているのか？　共産党と絶対的に対立しようというのではない、そういう考えはない。自分は民族と祖国の立場から、祖国と人民の利益を思ってやることなら、共産党を信奉する。だがその逆に、損害を与えるなら、当然反対する。当時の状況は実際、情にも理にも法にも合わない。だから彼女は反抗した。彼女はこう認めている―いま自分は反対するが、もし党がいま変わりさえすれば、もし良い方向に歩み始めれば、以前通り信じられる。党と道を同じくできると。彼女ははっきりそう認めていた。彼女は「国を愛し人を愛する青年として、自分の責任は可能な限り、党の治政の民主化に協力し促進させること、国と民族の利益から出発し、党の指導を確認しつつ、誠実に仕事をして人々とともに社会を前へと進め、たえず新鮮活発にさせることだ」と考えていた。

このシークエンスが示す『星火』の契機は、次のようにまとめられる。『星火』は、張春元が中心となって、1957 年までの「百家争鳴」のような共産党に対する批判を、北京大学でおこった学生運動ないし大衆運動のかたちで喚起するための雑誌をイメージして構想されたものだった。つまり、北京大学での民主運動の時に中心となった『広場』という雑誌のような役割を持たせようとした。それとともに、北京と結びつくことで、大飢饉をめぐる地方行政に対する批判を、中央のひざ元でおこさせようと期待した。それに対して林昭は、『広場』が北京大学の学内雑誌だったのにくらべ、『星火』は完全に地下印刷であり、リスクが高すぎるから、内部のものとして、意見交換にとどめるべきだ、共産党に対する修正意見は出すとしても、共産党を否定することはできない、と彼らに意見した。

ところが実際には、このシーンまでの『星火』の引用でわかるように、できあがった『星火』は、当初のイメージをはるかに超えたものになっていたのである。上のシーン 43 につなげたシーン 44 では、張春元の意見がすでに林昭のような抑制を超えていたことが示されている。

44　『星火』1 号、張春元「人民公社を論ず」を監督が朗読。

農民を軍事的組織の形を使って編成していき、統治を強化して農民の移転や就職や、外で生計を立てる最低の要求と道をふさいだ。自主性と自由の権利は全くない。目に見えない枷と鎖で農民を結わい、奴隷の烙印を押している。

これは人民公社の抑圧的性格を同時代に指摘したもので、中国現代史上、他に類を見ない論説である。これを読むと、張春元の現状認識の鋭さに驚かされるとともに、林昭の提案した『星火』のあり方と食い違っていることに気付かされる。この違いがどう展開していくのかという問題意識が以降のシーンへとつなげていく。

45　譚蝉雪が『星火』に関する秘密会議の時の様子を証言する。

譚：『星火』を本格的に話し合ったのは、北道府ホテルだった。あれが正式な会議だ。そこには、張春元、顧雁、胡暁愚、苗慶久、あと孫和がいたか覚えていない。彼らはそこでいくつかの問題を正式に話し合った。まず刊行物を出すべきか否か。出すべしで一致した。刊行物には意見交換と認識の統一という作用を期待していた。だから必要性が高いと思った。定期か不定期か、とりあえず不定期で様子を見る。この会議は重要な第一歩であり、しかも決定的な第一歩だった。会議が終わってから、各自執筆に入った。張春元はとっくに腹案があった。戻ってから、張春元と胡暁愚と顧雁はそれぞれ別個に執筆した。

この話から、彼らが林昭の影響を強く受けていることがわかる。『星火』は「意見交換と認識の統一」にとって重要だという点だ。林昭の意見、「考えを交換して、影響を拡げて団結しあうためには、特に分散して自由に行動できない情況では、『星火』の出版は啓蒙に欠くべからざる一歩だ」というのを承けている。向承鑑が紹介したように、各地の公社に分割して配置されている彼らにとって、まず意見の交換と認識の統一が、体制に逆らう自己の思想を維持するために、極めて重要な碇だったのだ。だからこそ『星火』は、自分たち内部に配布するための印刷だった。その一方で林昭は「誰でもわかっている話を書くのなら、わざわざ書くまでもない」とも言っている。餓死や役人のデタラメを誰でも知っていたことは、冒頭の村の医者や教師の話で示されている。それなのに、なぜまた文に書こうとしたのか。その疑問がシーン 46 へとつなげていく。

46　星火のメンバー苗慶久と胡傑監督の対話。

監督：餓死や役人のデタラメは誰でも知っていたのに、なぜまた文に書こうとしたのか？

苗：それは自分で目にした事実だ。それがソ連の借金追及のせいにされていた。自然災害だとも言われた、百年に一度の災害だと、実は人災なのに。それで、全ての地方幹部がウソを言って人々を騙していた。私たちが書いた人民公社のことにせよ、彭徳懐は正しいということにせよ、全て農村の事実に基づいて書いた、みんなに真相を知らせるためだ。

この一連のシーンのつなぎで、胡傑監督は『星火』のメンバーが、『星火』という地下雑誌を作ることで、自身を犠牲にせざるを得ない方向に走っていくことになったプロセスをきめ細かく描き出していることがわかる。

彼らの主張が当初から林昭のような抑制を持ち得なかったことは、ここまでに紹介された『星火』の引用や、シーン 54 で監督によって朗読される顧雁の発刊の辞である程度わかる[7]。しかし、シーン 54 の顧雁の発刊の辞で、朗読されなかった部分を含めて発刊の辞の全文を読んだ場合、顧雁の主張は「意見の交換と認識の統一」に止まるものではなく、その先まで踏まえた、非常に激越なものであったことがわかる。以下に原文から全文を翻訳し[8]、監督が朗読した

[7] 顧雁は発刊の辞を書いていることから、『星火』の主要人物の一人だとわかる。彼は北京大学で物理学を専攻した。彼の同級生には、1980 年代後半に民主化運動の旗手となった方励之がいた。星火事件で 17 年の懲役、出獄後、蘭州大学を経て、中国の科学技術研究の最高峰である中国科学技術大学に招かれて教授となる。青年時代を刑務所で過ごした彼が、なぜ科学技術の教授になれるのか。彼の友人の話によると、彼が入っていた青海省の刑務所の所長は、彼の才能を惜しんで刑務所内の図書室係に任命し、内外の学術雑誌を取り寄せることを許したのだという。刑務所の外では、文化大革命で学術雑誌の入手どころではなかった。出所したころは文革も終わっており、人材が欠乏していたのである。

[8] 譚蝉雪編著『求索―蘭州大学『右派反革命集団案』紀実』（香港天馬出版社、2010 年）28 頁に掲載された『星火』原文を翻訳した。

部分に下線を引く。

54　『星火』発刊の辞、顧雁「幻想を捨てて戦いに備えよ」を監督が朗読。

目覚めの時が来た！　もし君が将来の幸せのためにベルトを締め直したのなら、もし君が人々の豊かさのために戦ったのなら、もし君が仕事を完遂せんと励んできたのなら、今日この日こそ目が覚めたはずだ。ベルトを締め直した結果は食糧のさらなる減少、日々の戦いの結果は配給の全面的な欠乏、仕事に励んだ結果は冷酷非情な闘争と打撃だ。毛沢東主席の話を信じた人は、このたびの反右傾運動の陰謀で教訓を得たし、共産党をむやみに信じた人は、彭徳懐の話から事実の真相を知った。じつは誰であろうが、目の前の社会現象を少しでも冷静に分析すれば、一致した結論を得ることができる。数年間、逆行した結果、いまの統治者集団は、すでにつける薬もないような悪性の循環に陥っており、秦の始皇帝の旧轍に一歩一歩はまりつつある、と。

かつては進歩的だった共産党は、十年足らずでなぜかくも腐敗・反動に変わり果てたのか。国内では怒りの声が沸騰し、反乱は四方に起きているではないか。国外では四面楚歌の立場に陥っているではないか。これは、全人民の天下を私有財産とし、大小となく、すべて一色に党員によって管理した結果である。これは、偶像崇拝を立てて民主を圧迫することで、中央集権を築いたファシズムの結果である。これは、寡頭政治の思い上がりによって、馬を鹿と為す転倒をおこない、ひたすら逆行した結果である。この独裁統治をすら社会主義と言い張るなら、寡頭政治によって壟断される国家社会主義に他ならず、ナチスの国家社会主義と同類に属するのであって、真正な社会主義と少しも共通する点はない。古語にうまいことを言っている。「天作孽猶可違、自作孽不可活［天のなした禍いはまだ逃れることができるが、人が自分でなした禍いでは生きのびられない。孟子の語］」。一回一回と徹底されるあの反右派運動はまさにそうであり、1 日を 20 年に等しくしようとするあの大躍進はまさにそうであり、いまの統治集団の死を加速させているのだ。

いま全人民は厳粛な任務に直面しているのだ。反右傾運動の高潮に続いて、1957 年より大きなうねりが来ようとしている。すでに目覚めた同志たちよ、「民主的社会主義」「科学的社会主義」という共同の目標のもと、我々を団結せしめ、機を逸さず、大衆を覚醒させ、目の前にある強権統治を徹底的に粉砕すべく奮闘しよう！」

ここでいう「反右傾運動」とは、1959 年の廬山会議で国防部長の彭徳懐と中央政治局候補委員の張聞天らが大躍進運動に対して異議を申し立てたのを受け、大躍進に異議のある党員を抑圧した運動のことである。顧雁は、「大衆を覚醒させ」「強権統治を徹底的に粉砕する」ような

機運が来るので、団結しようと呼びかけているのである。

顧雁がいうこの機運とは、大衆運動の興起をいっているのだと思われるが、具体的にはどのような大衆運動なのか。「怒りの声が沸騰し、反乱は四方に起きているではないか」、つまり大衆による暴動や反乱の興起をいっているのだろう。この点では、顧雁と向承鑑の現実認識は近かったといえるのではなかろうか。向承鑑の認識は、すでにシーン 35 で示されている。

35　向承鑑と胡傑監督の対話。

向：1959 年 10 月に機会があって出張することになった。（中略）太原から戻って、そのときもう決めていたんだ、真理に身を捧げようと。それしかないと決めていた。

監督：あなたの文章にはこうありますね。「苦役の連続で農民は骨の髄まで恨んでいる。彼らの怒りは沸々とわき上がり、一触即発だ。実は小規模の暴動は小さな火のように地に満ちている」。これは、あなたが当時書いたことですね。

向：君は、それをどこで見た？　持っているのか？

監督：はい。これは「張春元・苗慶久右派反革命事件」といい、その判決報告書です。これは当時のあなたの言葉ですね、「我々は反対する、腐れきった現政権に、腐っているのに偉大で英明だと自称する共産党現政権に。絶対にめげずに、その壊滅のために徹底的に戦いぬく」。

向：当時は死に物狂いだった。本当に捨て身だったよ……

向承鑑がいう「小規模の暴動は小さな火のように地に満ちている」とは、顧雁が考える大衆運動だったのではなかろうか。そうだとすると、『星火』という地下雑誌の名称が、毛沢東の使った「星星之火、可以燎原」（小さな火が野原を焼き尽くすまで大きくなる）という言葉にもとづくのは、彼らが実際に農村での暴動や反乱という小さな火（星火）を目睹したり側聞したりしたことにもとづくのだろう。向承鑑は次のような証言をしている。

33　星火メンバーの向承鑑が語る。

向：武山から西へ行った、隴西と武山の間に、鴛鴦鎮という所がある。ここで農民暴動が起こった。どんな暴動かというと、倉庫を襲って食糧を盗ったんだ。バンバンバンと捕まった後、パンパンパンと何人も撃ち殺された。

実は、大飢饉当時の農民が暴動をおこしていた具体的な資料は、伝わっていない（公開されていない）。当時の農民の社会心理に関する最近の研究でも、例えば高王凌は、当時の農民に「反

行為」はあったが、「反抗」には至らなかったとみている[9]。高王凌がいう「反抗」は、思想の交流、意見の交換、組織の準備、具体的な方策を備えたものである。その意味では『星火』がその反抗の例であろう。彼らの場合、思想の交流、意見の交換、組織の準備を『星火』によって実現できるところまで行っていたのであり、問題は具体的な方策であった。本作は、その具体的な方策を考える「あがき」を内的な動因としているといえよう。

彼らは当初の目的を超えて、『星火』を外部に配布することを考えた。それについて、シーン73からシーンがつながっていく。

73　譚蝉雪の話。

譚：第1号を印刷したあと、みんなで見て、みんなの感情はより高まったようだった。続けてやっていく必要があると感じていた。でもどうやって？　当時、長期的な計画もなかった。ただこの路線で続けるべきだ、こうすれば意見交換できるのだからと考えた。当時、外部に配布するつもりなんてなかった。のちに張春元らが、現在の当局の上層部に配布すべきだと提案した。北京、上海、広州、武漢、西安の五都市があがった。

74　向承鑑が『星火』配布を考えた理由を語る。

向：我々の考えでは党内に、正直な幹部が多くいると判断したからだ。

75　監督が甘粛省第2書記の霍維徳の話を読み上げる。

思想改造は知識人を陥れ、合作社と人民公社の運動は農民を陥れ、赤旗競争や先進性競争、ノルマの向上や時間外勤務は労働者を陥れ、全国の市場が全面的に品不足の局面を見れば誰だって「こうなるとわかっていたら革命しなかった」と言うだろう。

『星火』が意見交換という目的で印刷されたのは、林昭の提案した範囲内だった。これだけでも、当時の中国（その後も）では、法的に許されないことである。それを、各地の共産党幹部に送りつけるというのは、『星火』の役割を、思想討論のレベルから政変のレベルに持っていこうとしたものである。これは非常に大きな方向転換である。

これを提案したのは張春元であり、彼の独走ではなかったのか。私はこの点について、譚蝉雪へのインタビューで質問したことがある。彼女によれば、メンバーが相談して決めたのであり、林昭も最終的には同意して、北京の送付先の情報提供を受け持ったという。

[9] 高王凌『中国農民反行為研究』香港中文大学出版、2013年、152頁。

彼らが考えを変えたのはなぜか。シーン 74 はこの疑問でシーン 73 とつながる。大飢饉の原因、すなわち行政の腐敗を取り除くためには、一刻も早く行政の上層部に政変をおこさせるべきだ、各地の党幹部には、それを実行できる人物がいる、と考えたのである。シーン 75 は、行政の上層部に、彼らを理解できる思想の持ち主がいた例（『星火』に引用されている）をあげることでシーン 74 とつながる。

以上に例示したように、現実の変革の具体的な方策をめぐる「あがき」を軸にしてストーリーが展開されており、それが本作の構成の特長の一つなのである。

**ラストでのフィードバック**

もう一つ指摘したいのは、本作の構成において、始まりのシーンにつなぐことで終わるという手法である（本稿ではフィードバックと称する）。フィードバックは映画構成の定石的方法だが、それが効果的におこなわれている。始まりのシーンで紹介された杜映華が再びとりあげられるのはシーン 79 からである。

79　向承鑑が話す。

向:張春元はその年 6 月に武山に来た。このとき彼は武山ではなく、漳県にいた。私とちょっと話して、私は彼を杜映華の家に連れて行った。彼は私に 2 号の編集を積極的にさせようとした。そのとき私の手元には文章が二つあった。一つは林昭の「海鴎」、もう一つは何之明の論文、それから私も「母親を食べるの記」を書いてあった。私は事実にもとづいて書いたんだ。ある子供が母親を食べてしまった。一日に少しずつ少しずつ食べたんだ。最後に頭だけが残って子供は逃げた。あとで捕まって銃殺された。この事件にもとづいて「母親を食べるの記」を書いたんだ。

向承鑑の話から、杜映華が右派学生とつきあうようになったのは、向承鑑の紹介によったことがわかる。杜映華と張春元はこうして知り合い、杜映華にとって張春元は教えを乞うような存在になったのだった。

このあとシーン 83 まで向承鑑と杜映華のつきあいが述べられ、そのあと『星火』のメンバーが突然逮捕される話題に進む。冒頭に対応するのはシーン 109 からラストである。

109　杜映華の次男が遺品のスターリン選集を示す。

監督：これはお父さんの本ですか？

杜映華の次男：そうです。見せようと思って取り出した。他は没収されてどこにいったか

わからない。これらが唯一父の残したもの。私たちには記念だ。父が県委員書記のときのもの。唯一の形見だ。

110　向承鑑が杜映華について語る。
監督：杜映華は県委員書記だったから、体制内というべきで、このようにするとなったら非常に危険だと承知していたのに、なぜあなた方と行動を共にしたのでしょう？
向：杜映華は普通の党員と全く違う。私と杜映華と張春元とは、3 人とも農民の出だ。杜映華のことはよく知っている。彼の家は土甸子で代々農家だった。農民だ。革命に参加したのも国民党の腐敗を見たからだ。農民の苦労に見て見ぬふりはできない。だから奮起して反抗したんだ。

111　王新民が杜映華について語る。
監督：武山のある書記で杜映華という人、彼のことを知っていますか？
王：知っている。蘭州大の学生たちに同情した人だ。それで死刑になり銃殺された。

112　向承鑑が杜映華について語る。
向：杜映華は革命の初心を忘れなかったともいえる。これこそ最も本質的問題だ。

113　杜映華の息子が父親について語る。
監督：それからあなた方は土甸子で、反革命の家族という帽子をかぶせられたのですね。
杜映華の息子：母の魏家に身を寄せていた。それがダメなら、どうしようもなかった。あと、私たちは子供だったから、子供では批判闘争にもならない。今くらいの歳だったら終わっていた。母は農家で、連れていたのは子供ばかり。それに父の評判はよかったから、隴西や漳県・武山でも。
監督：いじめられなかったのですね。
杜映華の息子：いじめられなかった。政策通りにするために、ある種の政策にはみんなも逆らえないということはあったが。父の評判のおかげなんだ。

114　甘粛省天水監獄が映り、杜映華の長男が面会したときのことを語る。
杜映華の長男：1963 年、まだ子供のときに 2 回会いに行った。1 回は面会し、1 回は会わせてもらえなかった。あの頃は大変だった。鈍行で行って、天水に明け方 4 時か 5 時についた。

監督：お父さんはそのとき、どんな様子でした？

杜映華の息子：顔色が黒かった。顔色がとても黒いという印象がある。苦労している様子だった。

115　杜映華の次男が語る。

杜映華の子：父を知っている人はみんなこう言う、「共産党は、自分の最良の息子たちまで殺してしまった」と。隴西の最も早くからの地下党員は、国民党の白色テロでも死ななかったのに、最後は極左路線の餌食になってしまったのだ。

116　向承鑑が台地の前で火を焚いて、亡くなった同志に紙銭を贈る。

向：私は真理の前では従順になれる人間だ。自分が間違っていれば、どうされようと恨み言は言わない。死んでしまった仲間は、本当に惜しまれる。馮淑筠、鄧得銀、司美棠、胡学中、もちろん林昭は言うまでもない。心から残念だ。中国よ、もう 100 年だ。民主・科学という 4 文字は、中国にとって何て難しいことか！　杜さん、張さん……40 年前ここで壮絶な犠牲となった。何億という農民のために、我々民族の復興のために、あなた方は貴重な命を捧げた。亡骸は探し出せないが、あなた方の精神は今も私の心に生きている。あなた方が追究した民主と正義も、中国の大地できっと花開くはずだ。安らかに眠りたまえ。

冒頭にとりあげられ、本作の主要人物とされた杜映華が、『星火』をめぐるストーリーの中軸部分には顔を出さず、ラストになって急に登場し、星火事件の歴史的な意義づけに結び付けられている。しかし、杜映華が『星火』のグループに具体的にどうコミットしたか叙述されていない。重視されているのは、杜映華が党委員であり、プロレタリア専制の側にありながら、右派の人々と友人としてつきあった点である。つまり、農民大衆を救うために、階級差を乗り越えて団結する意志を持てたことである[10]。

ラストの焚火のシーン 116 では、そこが杜映華の銃殺された刑場であることを向承鑑のせりふ「40 年前ここで壮絶な犠牲となった」で示している。これにより、刑場を探す冒頭のシーンとつながってくるのである。「亡骸は探し出せない」というせりふの注釈が、冒頭の遺体が解剖実験に使われた話になっている。このシーンで焚かれている火は、一義的には死者を弔うためである。この地方の民間宗教では、死者を弔うために焚火をし、紙銭といわれる、冥界で通用

[10] 銭理群によれば、『星火』のメンバーは農民の運命をもって現体制批判の中心、出発点、帰結点としている点こそが歴史的に重要だとして、林昭の言葉を引用して「階級共同性」と指摘している。銭理群「『星火』: 大飢荒年代的中国「普羅米修士」－譚蝉雪『求索：蘭州大学「右派反革命集団」紀実』序」『爝火不息―文革民間思想研究筆記』Oxford U.P. 2017.135 頁。

する銀行券を燃やして冥界に届ける風習がある[11]。この焚火は、そうした表面的な意味だけでなく、象徴的意味がある。そこで銃殺された杜映華と張春元を主とする人々が、原野を燃やし尽くす始めの「小さな火（星火）」であったことを示している。さらに、その彼らの思想と願いの結晶が地下出版物『星火』だったことも示している。その「小さな火」は、プロメテウスが天界から盗んで人間に与えた火、つまり人間的に生きる精神の隠喩でもある。その火が画面で燃えているのは、その思想と願いが、いまも「小さな火」として燃え続けていることを表している。そのことは、向承鑑のせりふ「あなた方の精神は今も私の心に生きている」で示唆されている。

この「星火」は、向承鑑の個人的な主観において存在しているだけでなく、現在の中国において客観的に存在していることが示されている。それはシーン 77 とつながってくる。

77　譚蝉雪が何之明に言及したのを承けて、何之明にインタビューする。
監督：どうして蘭州大に行くことになったのですか？
何：それは紆余曲折がある。1955 年に高校を卒業して、すぐに受験した。一発で受かったが、蘭州大に行くには交通費がかかる。それで兄の所に行った。兄は革命に参加したが、粛反運動の時に審査を受けた。（電話が鳴り、監督が電話に出てかまわないという）
監督：私を尾行していた人がいたようだ。何之明さんの家族が突然電話してきて、私のインタビューを断るように求めたので、インタビューは中止となった。

「尾行していた人」が電話をかけてきた何之明の家族でないことは、いうまでもないだろう。このシーンは、星火事件が過去になっていないことを表しており、「小さな火」は現在でも大きな火に成長しては困る存在なのである。

### 描かれなかったもの

以上は本作の構成上の特長であるが、その一方で、本作には描くべき問題を描いてない側面もある。上述のように、60 年が経過した今でも過去となっていないような問題に取り組むとなると、取材も容易ではないことが理解できる。隴を得て蜀を望むわけではないが、描かれなかったものをとりあげることで、さらに本作の理解が進むだろう。

[11] 王兵監督『鳳鳴』で、餓死した夫を弔う和鳳鳴は、「もちろん現地の風習に従い、紙銭なども持参していたから、焼きながら、読み上げた」と語っている。和鳳鳴は蘭州の人であり、「現地」というのは甘粛省酒泉の夾辺溝であった。

叙述不足を最も感じさせるのは、グループの地下活動が露見したシーン 83 である。

83　向承鑑が杜映華から犠牲者の様子を聞いたことを語る。

向：1960 年 4 月か 5 月ころに杜映華の家に行った。彼は飢饉をどうするかを強調した。よそでは自分は無力だが、可能な限り努力して、自分の管轄内では餓死の悲劇を起こさせないようにする、と言っていた。

監督：そのとき彼は餓死者を知っていた？

向：知っていた。彼は、よその情況を私よりよく知っていた。彼からいろいろ教わったくらいだ。私は当時、外へ出る機会が少なかったから。彼が知っていたのは、武山だけでなく、甘谷、通渭、隴西、定西、漳県、泯県まで知っていた。陰暦の 3、4 月の間に、ある県で一万人余りが餓死したという。それが武山県だ。これは杜映華が教えてくれたのだ。本当は、もっとひどい所がいくらでもある。彼が言うには、各管理区や生産隊に通知して、食糧不足でどうしようもなければ、すぐに全員を自宅待機にして、家で寝かせて休ませ、なるべく体力の消耗をなくすように通知してあるとのことだった。7 月になって、張春元から突然電話が来た。暗号で「おばさんが病気だ。伝染病だから、感染に注意して隔離せよ」と。すぐにわかった。私の判断では、あちらで問題が起こったら武山もまずいことになる。

向承鑑はグループの摘発が始まったことを電話で知らされる。当時は各家庭や個人の部屋に電話が備わってはおらず、職場などの大きな単位にしか電話はなかった。したがって、電話によって秘密の話はできず、暗号を使ったのである。その暗号は事前に乱数表があったり、読解のルールが決まっていたりする周到なものではなく、以心伝心で理解できる程度のものだった。「おばさんが病気だ。伝染病だから、感染に注意して隔離せよ」の「おばさん」とは女性である「譚蝉雪」、「病気」は「捕まった」、「感染」は「指名手配される」、「隔離」は「逃げろ」の意味だろう。シーン 83 までに張春元と譚蝉雪が恋人同士だったことが示されており、向承鑑もそれを知っていたことが予想されるので、「おばさん」が「譚蝉雪」であることは容易に推定できる。しかし、なぜ譚蝉雪はつかまったのか、なぜ張春元がそれをいち早く知ったのか、叙述されていない。

この事情についても、譚蝉雪への私のインタビューで詳しく説明があった[12]。要するに、彼女は香港に出て、ユーゴスラビアの関係機関に駆け込み、大飢饉の現状を新たな社会主義をめざ

[12] 土屋編『文化大革命を問い直す』勉誠出版、2016 年 11 月、67 頁。譚蝉雪『求索』104 頁にも少し言及がある。

す国々に伝えようとした。しかし、国境警備隊に捕まり、広州で留置されて労働教養にあたらせられた。そのときに広州の友人に手紙を書き、張春元に自分が捕まったことを伝えさせた。しかし、その手紙は当局から検閲されていたのである。その結果、彼女の保護者を偽装して広州の留置所に赴いた張春元も逮捕された。

インタビューによれば、ユーゴスラビアの機関に駆け込むという方策は、張春元らと相談したことだったという[13]。だとすると、『星火』を各地の中共幹部に配布するという方策から、さらに一歩踏み出したことになる。もし実現していたら、ユーゴスラビアの対応いかんでは、国際的な大事件となったことだろう。当時、大飢饉の実情は国際的には秘密にされていたから、その実情を暴露することになる。

本作のストーリー展開からすれば、具体的な方策をさぐるあがきの最後にこの事件を位置付けることができたはずだが、監督はそれをあえてしなかった。ただし、それを考えた痕跡がある。林昭が張春元をユーゴスラビアに注目するよう導いたことが、シーン 64 以下のシークエンスで示されている。

64　譚蝉雪が張春元と林昭の話し合いについて語る。

胡：そのとき張春元は林昭と何か深い話をしたのでしょうか。

譚：たぶんそうだろう。直接、率直に。そうでなければ林昭が自分の資料室から『ユーゴスラビア共産党綱領』なんてものを持ってきて彼に渡したりしなかっただろう。そうでしょう？　ある程度までいってなければ、率直にできるわけがない。

65　監督が向承鑑に『ユーゴスラビア共産党綱領』の影響について質問する。

監督：『ユーゴスラビア共産党綱領』はどのように啓発的でしたか？

向：その啓発は大きかった。当然ながら、当時は今ほど状況がわからなかったから。当時は、色々な側面から推測するしかなかった。中国共産党がソ連共産党と仲違いしていることは、当時既に感じとれた。しかも、ソ連内部で大量に発生している状況も、色々と推測していた。それで考えたのは、中国のこの状況は、つまり 1959 年前後のことだが、ソ連の

[13] この方策を他のメンバーがどれだけ承知していたか、裏打ちはとれていない。シーン 101 で、メンバーの一人は逮捕後の供述で、全国の人民公社の幹部に『星火』を送り付ける準備は 1960 年 5 月のあと中止になったが、その「原因はわからない」と述べている。譚蝉雪の行動から考えると、その原因は、譚蝉雪が香港に出る方策に切り替えたためだった可能性がある。だとすると、グループのメンバーでも、方策の変更を知らなかった者がいたことになる。とはいえ、この供述が事実を伝えているかもわからない。ひとまず譚蝉雪の言にもとづいて推理するしかない。また、顧雁に対する江雪のインタビューによると、1960 年夏に顧雁は張春元から譚蝉雪の香港密出国の件を聞き、二人の関係は不愉快になったという（江雪「尋訪“星火”」『今天』総 121 期 2019 年 1 月、254 頁）。

状況と似ているのではないか、ということだ。この道は先に進めない、行き止まりの道だと。それに、自分がマルクス・レーニン主義に没頭してから、疑念を消してくれず、答えを与えてくれないばかりか、むしろ疑念を深めるばかりだったのだ。

66　「星火」メンバーの王新民が当時のユーゴスラビア共産党に対する考えを語る。
王：私はユーゴ共産党の２条に賛成だった。１つはユーゴが当時出した、「ユーゴ共産党は人民大衆の中にあるのみ、人民大衆の上に凌駕せず」という観点に賛成だ。２つめは、チトーらを含めた政治家の待遇が、模範労働者の待遇より高くないことだ。この２条はまったくうれしかった。だから賛意を示したんだ。

これらのシーンはやや唐突の感があり、ユーゴスラビアのことが彼らのなかでどのような重要性を持っていたか、あまり説得的に示し得ていない。そして、ここには香港のユーゴスラビア機関に駆け込むという話は出ていない。監督はユーゴスラビアの話をわざわざ持ち出しているが、譚蝉雪の行動が『星火』メンバーで考え出した方策かどうか、裏付けがとれなかったようである。そのため、この話題を割愛したのではなかろうか。
もう一点の不足は、張春元が脱獄した話題である。この件はすでにシーン 62 で登場する。

62　譚蝉雪が張春元について語る。
譚：当時、張春元と会える機会は少なかった。私が働いていたのは甘泉で、彼は馬砲泉にいた。その間はけっこう距離がある。しかも、北道で用事を済ませに行くたびに、馬砲泉を通るから、そんなときにやっと少し会えたくらいだった。私たちはけっきょく右派の身だったから、勝手に出かけられなかった。彼は個人の利益だけを考えるのを嫌っていた。彼が脱獄したあと、外に出たあとも、自分一身の自由など問題ではないと考えた。目前の日の送り方について、どう言っていたかというと、これでは自分にも友達にも申し訳がないと考えていた。それで北京へ直接出向こうとしたのではないか。北京へ行って直接、孫自筠みたいに『紅旗』とか『人民日報』とかに行って、自分の考えを述べに行こうとした。

脱獄は伝奇的なだけに、そのあとずっと視聴者の心理に残存するが、最後まで叙述されない。脱獄後の張春元は、基本的に単独行動であり、意志を貫こうとしたら、結局、本作の始めの方で叙述された孫自筠の方策に戻るしかない。この点でも、本作がとった「あがき」の軸上に張春元の脱獄後の行動を置くことができたかもしれない。しかしそれは、すでに『星火』をめぐる方策ではなく、本筋から離れて、張春元個人を悲劇のヒーローに仕立ててしまう可能性があ

る。

張春元の脱獄は、譚蝉雪へのインタビューによると、仮病を使って刑務所から警察病院に移り、警備の緩みに乗じて脱走し、上海方面に逃亡したが、杭州で警察の職務質問に遭遇して拘留された、とのことで、北京への直訴は実現できなかったのであった[14]。

## 結論

最後に、星火事件の歴史的な意義を本作はどうとらえているか考えたい。

監督はシーン 118 の字幕による謝辞で「この映画を中華民族の最も暗黒の時代に、大地のために火種を盗った英霊たちに贈る」と書いている。この言葉は、向承鑑が焚火をしているシーン 116 から、林昭のプロメテウスの詩を監督が朗読するシーン 117 を経由している。それゆえ、「英霊たち」すなわち杜映華と張春元らは、人間を人間たらしめる「火」を盗った、つまり人間性が失われた時代に人間性を回復させようとした、とまとめているのである。「(『星火』のメンバーは）理想と真理を保持し、人の自由と尊厳を保持した。もし彼らがいなかったら、この時期の歴史はただ卑劣な屈辱と沈黙を残しただけで、私たちは祖先と子孫に申し訳が立たない。この点で、林昭と『星火』の戦友たちは、わが民族の魂を救ってくれたのだ」と銭理群が指摘しているのは、監督のまとめと通じている[15]。

しかしこれは、本作が構成の軸とし、上に述べてきた具体的な方策の「あがき」を超えた、ある種高みからまとめているように感じられる。「人間性を回復させようとする」という普遍的な問題としてまとめたゆえに、ドキュメンタリーとしての感動をもたらすともいえるが、星火事件の政治史的意義が後景にまわった嫌いがある。

そこで、政治史的意義として二点を挙げておこう。一つは実際の政治的な影響、もう一つは星火事件の政治思想史的解釈に関わる。

『星火』は公開されなかったし、配布されなかった。しかし、証拠品として当局に没収され、当局の関係者はこれを読むことになった。この影響がどのように党幹部のあいだで作用したか知る由もないが、このあと甘粛省内で指導者の変更を志向する動向が生じたことと無関係ではなかろう。これについて向承鑑の証言が参考になる。

107　向承鑑が審判の状況を語る。

向：私は、留置所では他の人と違っていた。苗慶久と違う。彼は審判では何もしゃべらな

[14] 前掲『文化大革命を問い直す』67 頁
[15] 銭理群の前掲書 134 頁。

かったらしい。私は審判のたびに罵倒した。相手の鼻先を指さしながら、聞くに堪えない言葉で罵倒した。死に物狂いだった。指さして数えた、「畜生が 1 匹、畜生が 2 匹、100 匹の畜生だ」、相手は裁判長とか公安局長など幹部ばかり。「あなたがたは口を開けば、全身全霊で人民のために服務すると言うが、表で苦労するふりをして裏で甘い汁を吸っている。あなたがたは共産党員だろう、聞こえのよいこと言っても、そんなことやっているのか？」私を 6、7 人、武装はしてないが屈強な男が囲んでいる。武装警察がずらり、弓なりに囲んでいる。私はしゃべっているうちに激昂し、立ち上がって連中を指さして罵倒した。「あなたがたはそれでも人間か？　農村の状況を知らないのか？　眼も見えるし耳も聞こえるだろう。眼が見えず耳が聞こえなくても、鼻で臭いをかいでみれば、どこも彼処も死臭がするだろう。少しでも人間性があれば心中たまらないはずだ。あなたがたは人間か？　いや違う、人間じゃない。あなたがたは共産党員じゃないばかりか、人ですらない。畜生以下だ」。罵倒するにつれて激昂した。審判は一回一回私にとって戦場と同じだった。思いの丈を全てしゃべろうとした。怖いものなし、怖いものなしだ、本当に。その時わかった、自分の話に嘘偽りはない、真実だと。ときには彼らの心も動いたし、影響を受けた。その影響はかなりだった。

このとき「相手は裁判長とか公安局長など幹部ばかり」だとあるのは、当局のこの事件に対する重視を示している。その幹部たちが「心も動いたし、影響を受けた。その影響はかなりだった」というのは、彼らが『星火』を読み、向承鑑の話を聞いて、アジテーションに折伏され、現状認識を新たにしたことを意味する[16]。

向承鑑らが逮捕されたのは 1960 年 9 月 30 日である。そのあと同年 12 月上旬、蘭州では党西北局による蘭州会議が招集され、人命救済策がすぐに施された。本作で、餓死を放置し人権蹂躙を指示する行政権力の根源とされた甘粛省第一書記の張仲良は、この会議で解職された。つまり、彼らの逮捕から 2 か月余で政治情勢が急転回し、実際に政変がおこり、大飢饉の解消へ舵が切られることになったのである。シーン 107 の審判がいつおこなわれたか、示されていないが、内容から見て、蘭州会議以前のはずだ。

この会議は、党中央監察委員の銭瑛が推進したものだが、彼女は甘粛の現実を認識していた。彼女は 1960 年秋、甘粛省酒泉を視察した際、ゴビ砂漠で道に迷い、人骨の散らばるなか、右派を強制労働させて大量の餓死者を出した夾辺溝農場に乗り込んだとされている[17]。この話の信

[16] 向承鑑に対する江雪のインタビューによれば、向承鑑は獄中でこの審判のとき現場にいた公安幹部と出会ったという。この幹部は別件で懲役刑になったのである。向承鑑はその人物から自分の発言が彼らに影響したことを聞き知ったらしい（江雪前掲 284 頁）。

[17] 李景沆の口述による。依娃『尋找大饑荒幸存者』明鏡出版、381 頁（銭瑛が銭王英と誤植されている）。

憑性は裏打ちがとれないが、党中央の要人は運転手つきの車で視察するから、「道に迷った」という話はわざとらしい。あるいは、彼女を含む党中央が、どのようにして夾辺溝（甘粛）の状況を知ったのかを不明にしておきたい、という事情があるのかもしれない。張仲良は、自省の大飢饉と餓死者のことを中央に知られないように、独裁的な抑圧を各方面に加えていたことは本作で示されている[18]。何らかのルートで、「小さな火」が一触即発である状況が中央に伝わったと考えられる（もちろん、星火事件だけがその作用を及ぼしたと言いたいわけではない）。

もう一つは、本作で後景にまわった「星火」の象徴的な意味である。監督のまとめは、「星火」をプロメテウスの火の方向で解釈しているが、本来は「星星之火、可以燎原」の火ではなかっただろうか。張春元の「あがき」は、共産党への強烈な批判ではあったが、あくまで党内の良質な部分に期待する範囲にある。譚蝉雪は、『星火』を外部に配布するつもりはなかったと語り、上述のように、本作もそれに準じる構成となっている。しかし、『星火』原文、特に顧雁の「発刊の辞」（上掲）や向承鑑の「目前の形勢と我々の任務」を読むと、彼らの論調は、現場を知らない人々に現状を知らせ、啓蒙し、団結へと導こうとしている。この向承鑑の文は、顧雁の影響が濃厚で、「我々の目前の任務は、人民を呼びおこし、幻想を捨て、行動を統一させ、戦闘に備えること」、「我々は革命の手段によって、すでに死んだ階級（帝国主義と蒋介石グループ）に由来するあらゆる妄想に対処する」と書いている。したがって、顧雁らが志向していた方策は、農民暴動から革命への路線ではなかっただろうか。当時の中国にこのような思想が存在したことを示すまとまった資料は他に類をみないのであり、その点を私たちは理解すべきである。本作で顧雁へのインタビューが少ないのは、おそらく顧雁から証言をあまり取れなかったためだろうが、それもあって、顧雁が志向していた革命路線の政治思想史的な意義が、本作では後景にまわってしまったといえるのではなかろうか。しかし私たちとしては、これは監督の技量の問題ではなく、「星火」が今でも生きているがゆえの限界だったことも理解すべきだろう。

＊本論は、専修大学研究助成平成 30 年度「中国映像歴史学の生成と展開」、令和元年度「映像から中国現代史を再考する」の研究成果の一部である。

[18] 張仲良による抑圧は、王兵監督が夾辺溝の生存者にインタビューした『死霊魂』（2018 年）でもたびたび述べられる。